

表1 1894年から1945年まで日本がかかわった戦争

年次	戦争名	日 本			相 手 側		合計	
		動員数	戦死者	負傷者	戦死者	負傷者		
1894-5	日清戦争	240,000	17,282	170,000	30~40万	朝鮮・甲午農民戦争	* 2、* 5	
1895-6	台湾征伐(台湾共和国征伐戦)	50,000	164	4,624			* 4	
1896-1906	台湾民衆のゲリラ掃討戦		9,592				* 6	
1910-14	台湾征服戦争		2,200				* 12	
1900	義和団事件	22,000	3~4000		2~30000		* 7、* 14	
1904-5	日露戦争	1,070,000	120,000	300,000	270,000		* 2、* 14	
1907-11	朝鮮軍隊反乱・義兵鎮圧		133	269	17,688	37,000	* 10	
1914-18	第一次世界大戦	(6500万人)	(1000万人)	2100万人				
	"		1,350	青島出兵			* 17	
1919	朝鮮・三一独立運動	20,134	警察力		8,000	16,000	* 8、* 15	
1918-22	シベリア出兵	73,000	3,500	21,000			* 8	
1927	第一回山東出兵	4,200					* 3	
1928	第二回山東出兵	25,000	5,000		7,600	1,400	* 1、* 14	
	第三回山東出兵	15,000			4,000		* 1、* 3	
1930-10	台湾「霧社事件」	2,000	134	215	1,000		* 5	
1931	満州事変	15,000			3,000	平頂山事件のみ	* 9	
	満州占領		1,169				* 1	
1932	上海事件	30,000	769	2,322	34,326		* 9、* 12	
1937-45	日中戦争	700,000	500,000		7,730,000	1000万人	* 1	
1938	張鼓峰事件	20,000	526	914	710		* 12、* 14	
1939	ノモンハン事件	20,000	16,000	10,997	3,435	15,286	* 12、* 14	
1939-45	第二次世界大戦		2200万人	5640万人				
	日本	9,700,000	2,400,000		1882万人	東アジア地域総計	* 1、* 11	
			市民50万人		291,557	670,846	米軍	* 1、* 16

第一次世界大戦の()は、連合国・同盟国の総数
 昭和史研究会編『昭和史事典』講談社、1984年
 高柳・竹内編『日本史事典』角川書店、1966年
 中村新太郎編著『日本歴史の研究事典』小峰書店、1967年
 *1 = 黒羽清隆著『日中15年戦争』教育社、1977年
 *2 = 『図説・昭和の歴史1 昭和史の源泉』集英社、1979年
 *3 = 『新編・日本史辞典』京大日本史辞典編纂会編、1990年
 *4 = 『日本全史』、1991年
 *5 = 『岩波・日本史辞典』、1999年
 *6 = 『帝国』日本とアジア』吉川弘文館、1994年

*7 = 小林英夫著『日本のアジア侵略』、山川出版社、1998年
 *8 = 『日本歴史大辞典』、河出書房新社、1979年
 *9 = 『日本史大事典』、平凡社、1993年
 *10 = 海野福寿著『韓国併合』、岩波新書、1995年
 *11 = 『決定版昭和史』、毎日新聞社、1983年
 *12 = 『国史大辞典』、吉川弘文館、1988年
 *14 = 『20世紀の戦争』、朝日ソノラマ、1995年
 *15 = 李進熙・姜在彦著『日朝交流史』、有斐閣、1995年
 *16 = 『昭和二万日の全記録 7』、講談社、1989年
 *17 = 『靖国神社御祭神戦没・事変別柱数』より算出

表2 <太平洋戦争での軍人軍属戦没者数> - 場所により日中戦争戦没者を含む

硫黄島	20,100	西イリアン	53,000
沖縄	186,500	ボルネオ	18,000
台湾	41,900	東部ニューギニア	
中部太平洋諸島		ビスマルク、ソロモン諸島	246,300
グアム	20,100	韓国	18,900
サイパン	55,300	北朝鮮	34,600
テニアン	15,500	旧満州	245,400
アンガウル	1,200	中国本土	465,700
ペリリュー	10,100	樺太・千島、アリューシャン	24,400
メロヨン	5,000	ソ連本土	52,700
トラック	8,400	モンゴル	1,700
マーシャル	19,200	合計	2,400,000
ギルバート	5,500		
その他の島	106,700		
フィリピン	518,000		
ベトナム、カンボジア、ラオス	12,400		
タイ、マレー、シンガポール	21,000		
ビルマ、インド	167,000		
インドネシア	25,400		

(厚生省援護局調べ)
 『決定版昭和史』、毎日新聞社、1983年
 大東亜戦役の人員損耗(1945年9月6日付朝日新聞記事)
 陸軍の死亡 35万 内、20万玉碎 戦傷病者 460万人
 海軍の死亡 16万 内、2060余 特攻死

表3 太平洋戦争の人的被害の推計(死者のみ)

中国	1,321万人
朝鮮	戦死・不明15万人、強制連行など70万人
ベトナム	200万人
インドネシア	200万人
フィリピン	105万人
インド	350万人
シンガポール	8万人
ビルマ	5万人
スリランカ	日本軍機が精神病院に投弾
ラオス	不明
カンボジア	不明
ニュージーランド	11,625人
オーストラリア	不明
モルジブ	数千人
東アジア地域総計	1,882万人
日本	221万3903人

表4 空襲・原爆による死亡者数(3調査の比較)(単位:人)

	経本調査	建設省調	朝日新聞
	全 国 (1948.5)	215都市 (1959.3)	229都市 (1991.8)
調査地域計	299,485	336,738	432,531
30都市計	259,482	313,182	404,843
27都市計	62,206	69,575	80,843
仙台市	998	901	1,442
日立市	1,266	1,266	1,578
東京区部	95,374	91,444	114,000
横浜市	4,616	5,830	8,000
川崎市	1,001	1,001	768
長岡市	1,143	1,143	1,461
富山市	2,149	2,275	2,275
福井市	1,576	1,576	1,684
甲府市	1,027	740	1,127
静岡市	1,813	1,813	2,000
浜松市	2,447	2,947	2,947
名古屋市	8,076	8,240	7,858
豊川市	1,408	2,372	3,000
津市	1,885	1,498	4,000
大阪市	9,246	10,388	12,000
堺市	1,417	1,876	1,876
神戸市	6,789	7,051	8,400
明石市	1,360	1,464	1,496
和歌山市	1,300	1,625	1,200
岡山市	1,678	1,678	1,737
広島市	78,150	78,150	140,000
呉市	1,939	2,062	2,700
徳島市	570	1,166	1,400
高松市	927	1,273	1,359
福岡市	953	2,000	2,500
北九州市	2,385	2,251	2,385
大牟田市	780	780	1,291
長崎市	23,752	74,013	70,000
佐世保市	1,030	1,030	1,030
鹿児島市	2,427	3,329	3,329

(出典) 広田純「太平洋戦争におけるわが国の戦争被害」
『立教経済学研究』第45巻第4号 1992年、P17

表5 沖縄戦における死亡者数 (1945年3-6月)

区 分	死亡者(人)
総数	188,136
軍人軍属計	94,136
沖縄県出身軍人軍属 ¹⁾	(228,228)
その他	(65,908)
住民計	94,000
戦争協力者 ²⁾	(55,246)
一般住民 ³⁾	(38,754)
(参考) 沖縄県人口 ⁴⁾	590,480
(参考) アメリカ軍死者	12,520

(注)1) 昭和19年7月頃から、在郷軍人を中核として市町村の村落単位で編成され、軍の指揮下で作戦に加わった「防衛隊」を含む。

2) 昭和50年3月までに「戦闘参加者」として認定されたもの。これら戦闘参加者は陣地の構築、食糧・弾薬の運搬、壕や宿舎の提供など、さまざまな形で戦闘に協力した。ここには「学徒隊」に編成された師範学校・中学校・高等学校等の男女生徒を含む。

3) 主として老人、子供とみられる

4) 昭和19年2月28日現在で行われた人口調査の結果

(出典) 中村隆英・宮崎正康編『史料・太平洋戦争被害調査報告』
東京大学出版会、1995年、P13

表6 軍人軍属の終戦時現存者数および死亡者数(単位:千人)

	計	陸軍	海軍
終戦時現存者	7889.1	5472.4	2416.7
終戦前死亡者	1940.1	1482.3	457.8
終戦後死亡者	180.9	164.9	16.0
死亡者計	2121.0	1647.2	473.8
死亡率 %	21.6	23.7	16.5

(注)1) 朝鮮人、台湾人を含む

2) 死亡者数は、日中戦争関係死亡者(陸軍181,000人、海軍7,700人)を含む。また終戦時以降死亡者、戦時死亡宣告により死亡と見なされた者およびその見込のある者を含む在郷死者をふくまない

(出典) 広田純「太平洋戦争におけるわが国の戦争被害」
『立教経済学研究』第45巻第4号、1992年、P10

表7 朝鮮人労務者の対日本動員数

年度	計画数	石炭山	金属山	土建	工場其他	計
1939	85,000	34,659	5,787	12,674	-	53,120
1940	97,300	38,176	9,081	9,249	2,892	59,398
1941	100,000	39,819	9,416	10,965	6,898	67,098
1942	130,000	77,993	7,632	18,929	15,167	119,821
1943	155,000	68,317	13,763	31,615	14,601	128,296
1944	290,000	82,859	21,442	24,376	157,795	286,432
1945	50,000	797	229	836	8,760	10,622
計	907,300	342,620	67,350	108,644	206,073	724,787
終戦時二於ケル現在		121,574	22,430	34,584	86,794	365,382

(注)1944年計画数は年度中途において、326,000に変更。1945年計画数は、第1・4半期計画として設定されたものである。合計が一致しないがそのままとした。

(出典) 西成田豊「労働力動員と労働改革」大石嘉一郎編『日本帝国主義史』3、東京大学出版会、1994年、P299

表8 中国人強制連行の実態

供出地域	供出機関	供出人員	供出方法			
			行政供出	訓練生供出	自由募集	特別供出
華北	華北勞工協会	34,717	24,050	10,667	-	-
	華北運輸股份公司	1,061	-	-	-	1,061
華中	日華勞務協会	1,455	-	-	1,455	-
	国民政府機関	682	-	-	-	682
満州	福昌華工株式会社	1,020	-	-	-	1,020
合計	(5機関)	38,935	24,050	10,667	1,455	2,763

(出典) 『日本帝国主義史』、P306

表9 泰緬鉄道建設に送りこまれた労務者数(単位:人)

	雇用合計	帰国者	死亡者	死亡率* %	死亡者	死亡率** %	逃亡者	降伏時 労務者
英領マラヤ人	78,204	6,456	29,634	(38.0)	40,000	(51)	24,620	17,488
ジャワ人	7,508		2,894	(39.0)	3,000	(40)	486	4,128
中国人(タイ)	5,200	1,300	500	(9.6)	1,000	(20)	3,400	-
インドネシア人	200	120	25	(12.5)	25	(12.5)	25	
ビルマ人	91,384	13,540	9,161	(10.0)	30,000	(30)	63,683	5,000
	182,496	21,416	42,214	(23.0)	74,025	(41)	92,220	26,616

(注) *は日本側の主張する死亡数、**英国側の推定死亡数
 (出典) 中原道子「東南アジアの「ロームシヤ」--泰緬鉄道で働いた人々」
 『岩波講座 近代日本と植民地』5、1993年、P145

「一人が二人の仲間を」ということになっています。昔有名な哲学者が「思想が大眾をとらえると、巨大な力になる」といったといわれています。そして、その巨大な力を形成するために、まず「一人が二人を獲得する」ことが出発点だといわれてきました。一人が二人を獲得する。その二人が、それぞれまた二人を獲得する。一人から二人、二人から四人、四人から八人といわゆる倍々ゲーム式に共鳴者は拡大します。この「一人が二人を獲得する」という言葉に私は強く感動しました。しかし感動しながらも「獲得する」という言葉に少し抵抗を覚えました。それは、その言葉の前に「同志を獲得する」という古い共産党的な二オイを感じたことに他なりません。もっと自由で明るい言葉、それは同志ではなく仲間だと思い、「一人で二人の仲間を」という標題にしたのです。仲間になってもらうためには、表1、表2の意味を深く理解していただき、現在マスコミによって流布され、影響力をもっている偏見とたたかわなければなりません。それが新しくつけ加えた表4~9なのです。

まず想いおこしてください。昨年から今年にかけて、私たちは豊岡・出石市を襲った風水害、中越大地震、印度洋の大津波を見聞し、追体験しました。そして、そこで私達が痛感したことは、自由に水が飲め、たべたい時には喰べ、眠くなれば足をのぼして眠わり、親子・兄弟・夫婦と一緒に生活できるという平凡な生活、今日の生活がそのまま明日につながるという、時に単調で退屈と思われる生活が、実は「幸福」の内実だということでした。それは、風水害、地震、津波という自然災害によって、私達がそれを失った時に、はじめて、私達は、「幸福」の実態を知りえたのです。メーテル・リンクの『青い鳥』で、チルチルとミチルが青い鳥をさがして過去の国やいろいろのところを遍歴して、帰ってきたら、自分の家で、青い鳥が死んでいたということは、このことを示唆するものでしょう。そして、私が空襲に着目したのは、「幸福」の破壊が、自然災害よりも、戦争の方が大きいということでした。今年の1

月17日は阪神・淡路大震災の10周年祈念ということで多くのイベントが開催され、犠牲者は4,633人と発表されました。表4「空襲・原爆による死亡者数」をごらんください。神戸の空襲による死亡者は、最近の経済安定本部の調査で6,789人、最大の「朝日新聞」の調査で8,400人になっています。阪神・淡路大震災ですから神戸市さらに明石市の死亡者を加えると最低8,149人から最大9,869人となります。阪神・淡路大震災の死亡者の約2倍弱から2.5倍弱になります。しかも、空襲の場合には全国が空爆や機銃掃射の被害にさらされていたから、隣接の諸都市からの援助もなく、もちろんボランティアの支援や仮設住宅の提供もありませんでした。それにもかかわらず、阪神・淡路大震災を下地にしたNHKの朝ドラの「わかば」にも、マスコミ各社の報道にも、地震の報道はあっても、空襲に関する報道は一言半句も存在しませんでした。明らかに、自然災害と戦争被害を切断し、戦争被害への回想が反戦につながることを防止しようとする政府・マスコミの意志が感じられます。

最近のNHKと「朝日新聞」との論争を通じて、はしなくもNHK内部に、番組に関する政府との事前協議が当然とする風潮が支配的であることが明らかになりました。検閲を当然とする風潮が、自然災害と人的災害(戦争災害)をきりはなしたのは、当然といえましょう。

表7、表8、表9は、いわゆる拉致問題と関係する表です。

戦争中、政府は軍隊の全滅を玉砕といいかえ、退却を転進といいかえました。敗戦後も敗戦を終戦といいかえ、今日にいたるまで、終戦と言う言葉が一般に使用され、8月15日を敗戦記念日という人はごく少数にとどまっています。本来言葉というのは哲学的に概念であり、概念は事象を反映するのです。この言葉=概念の本質を逆手にとって、言葉をかえることによって、あたかも対象や事態が変化したかのような錯覚を与えるのが言葉の魔術です。例えば、終戦とは、戦争が終わったということであり、太陽